

鳥と人間と植物たち

詩人の日記

田村隆一

徳間

とり にんげん しょくぶつ
鳥と人間と植物たち

《詩人の日記》

© 1981 Ryūichi Tamura Printed in Japan

413-1

1981年9月15日 初刷

著 者 田 村 隆 一
たむら りゆういち

発行者 徳 間 康 快
とくま かつ

東京都港区新橋四一〇二一〇五

発行所 株式会社 徳 間 書 店

電話(〇三)四三三・六二三一(大代)
振替 東京四一四四三九二番

製 本 印 刷

凸版印刷株式会社

編集担当 今井鎮夫

0195-597222-5229 (乱丁、落丁本はお取りかえいたします)

徳間文庫

鳥と人間と植物たち

《詩人の日記》

田村隆一



徳間書店

目次

プロローグ

5

烏 瓜

9

ヒモノ

21

アオジ

33

シジミ

45

緑の炎

57

CHERRY

69

草競馬

81

ミロの鳥

93

溶ける山

105

白昼夢

115

光りと痛み

125

大きな木

135

新年の手紙

147

家の中の死者

159

灯台から

169

立春

179

パスポート

189

北海の小さな島から

201

エピローグ

213

解説 泉秀樹

218

プロローグ

草原の風には色がついている

と歌ったのは

ある女性の詩人だった

それなら都市の五月の風には

色彩がないのだろうか

ぼくが住んだり通りすぎた都市など

たかがしれているが

ニューヨークの風には地下鉄の匂いが

ボンベイやマドラスの風には海の色が

エジンバラの風には北海のキング・サーモンの匂いが

そして

東京の風には集団的人間の色が

五月の風は

さまざまな色どりと匂いをただよわせながら

北半球の草原や都市をそよがせる

その深い意味を

どんな通信社や商社のテレックスでも

伝えることはできない

——隆一「風の色」

こんな詩を書いていたら、小説家の曾野綾子さんが、鎌倉の谷戸やとの奥にあるわが「ウサギ小屋」にやって来た。そこで雑談。

ぼくは番茶を飲みながら（ウイスキーではない）、アンマ椅子に腰かけている曾野さんに云う——

「ぼくたち、人間の生活は小さいこととか小さいもので成り立っていますよね。思春期から青年期にかけては、どうしたって観念的にならざるをえない。だって、まだ手を汚したこともないし、人間としての経験をほとんどしていないんですから。だから、どうしたって、大きなこと、大きなものに心が魅ひかれる。たとえば、革命、反体制、人類、国家、宇宙だとかね。それはまあ青年の特権でもあるし、その特権を行使しないようでは、彼、あるいは彼女が成熟したとき、小さなものの深い意味も分らないことになる」

曾野さん、アンマ椅子から応答する——

「小さなものっていうのを、くだらないものという意味にとるとすれば、自分自身の感情の起伏な

んかがそうですね。そうじゃなくて、小さいけれども大切なものという意味で考えれば、私たちの近隣の生活がそうだという感じがするんです。たとえばアフリカの南端のナントカ部族の人の生活なんて私たちにはわからないから、自分の手近にある、街の灯として見える人間の生活、私の生活も含めてですが、それが小さいけれどもたいへん大切なものだというふうに……

小説って一体何書くんだっていうふうな質問をされると、私は、自分でもよくわからないから、あまり真面目に答えないようにしてるんです。たとえばある夫婦がいて、どうもこの頃干物がまずくなったから、ひとつ家で魚買ってきて、鰹でも鯖でもいいから開きを作って、うまい塩加減で食ってやろうと思って魚を干しとく。夕方ぐらいに食べようと思ってる、ジイサンが親父が居眠りしちゃって、そのスキに猫が魚を取っちゃった。そうすれば、畜生と思って腹が立ちますよね。そういう小さな情熱なり感情の起伏が重大なものであると考える、これが小説だと云ったんです」

「なるほど、なるほど」ぼくはミツ豆を食べながら合槌を打つ。ウイスキーを飲まない週は、ダイフクかミツ豆を食べる。

アンマ椅子の曾野さんは言葉をつづける――

「大真面目でいいますと、やっぱり聖書の中には、小さなものに関してのいい言葉がいっぱいあるんです。たとえば『これらの弱い者を一人でも軽んじないように気をつけなさい』というような文章がありました。戦争の前、まだ聖書なんて読まないころに、私が教育を受けたシスターたちの口から聞いています。これはもう本当に、おとなの『美学』だと思った。この言葉がわからなければ、

権力志向になるでしょうし、詩もわからなければ絵も描けないだろうという気がつくづくしました。それは未だに残ってるわ。あんまり真面目な形ではないけれども」

そこで、ぼくの『詩人の日記』をふりかえってみると、まさに「小さいこと」と「小さいもの」だけで成り立っていることがあらためて思い出される。

「ウサギ小屋」に住んでいる小さな詩人（背だけは人並以上に高いけれど）の小さな眼が、はたして「小さなもの」に宿っている光りをとらえることができたかどうか。

小さなものに幸いあれ！

一九七九年初夏

烏

瓜

ぼくの日記は（記録係は家内）三年連用である。昭和四十年の正月に、ぼくの詩の教師である中桐雅夫がプレゼントしてくれたもので、一ページが三段にわかれていて、三年間のレコードが同じスペースに記録されるようになっていた。最初の一年は退屈だが、二年目に入ると面白くなる。なにせ、前年のレコードが上段にあるのだから、三年目に入ると、面白さが倍加する。三年間の日常茶飯事と諸物価の高騰が、一目で見渡せるのだから、劇的になるのである。つまり、すなわち、人間とは、なんと相不変、この感情をいだけでも、三年連用日記の発案者は、文化勲章に値する。

たとえば、十月十一日のスペースに目をやれば、こういうことになる――

昭和四十九年――晴。正午、極楽寺デ、ラーメン。R（ぼくのこと）、二日酔デ、食べラレズ。ビール。午後四時スギ、朝日ノ宇佐見、天羽両氏、『詩人のノート』出版ノ件デ来訪。六品ホド供ス。入レカワリニ、夜十時、毎日新聞ノ高瀬氏、来訪中、迷子ニナリ、R、迎エニ行ク。午前一時、R、高瀬氏ト出テ行ク。

昭和五十年――薄曇。R、東京ノホテルデ仕事中ダトイウノニ、新潮社ノ佐々木氏ノ報告ニヨルト飲ンデバカリイテ、少シモ仕事シナイ由。

昭和五十一年――Rトライスカレーデ夕食。R、飲マズ。さて、

昭和五十二年、つまり、昨年（昭和五十一年）の十月十一日は如何？

小雨。R、『かまくら春秋』ノ件デ、仏像拝観。午前十一時、女性編集者ト出テ行ク。夕刻、U誌ノ編集者ト、ウイスキーノ迎エ酒ヲ飲ミナガラ、R、才喋リ。トウテイ仕事ニナラズ、和（家内のこと）、強制的ニ口述筆記。午後八時、スパゲッティノ粗食ノ後、原稿ヲ持ッテ編集者帰ル。Rノ乱酔、コレデ六日目。

『かまくら春秋』というのは、すでに九十一号を刊行している、わが鎌倉のタウン誌で、湯川晃敏氏が撮影した仏像の写真に、毎号、鎌倉在住の各分野の人たちが、小文をつけている。ぼくのところにもお鉢がまわってきて、そこで、十月十一日の午前十一時、若い女性の運転で、浄光明寺のご本尊、阿弥陀さまをおがみに家を出たのである。

お寺は、扇ヶ谷の泉谷にあつて、源頼朝の祈願で、文覚上人が一堂を創建し、十三世紀中葉の建長三年に、真阿（しんあ）を開山にむかえて、北条長時が中興したと伝えられている。

小雨にけむる広庭には、花のおわったサルスベリの大木がひっそりと立っているだけで、人影はまったくない。

美しい女性が庫裡で案内を乞うと、四十がらみのお坊さんがいそいそと出てくる。

ぼくが自己紹介をすると、お坊さんはニコツと笑って、

「タムラさんなら、養老院で、よくお目にかかるじゃありませんか」

「養老院？」

「鎌倉の飲み屋ですよ」

鎌倉には、ぼくの行きつけの飲み屋が二、三軒あって、「F」というのはまさしく、老男老女の常連ばかりで、「R」というのは、お坊さんばかりで……それじゃ、このお坊さんとは、「F」で会ったのかしら、などと考えているうちに、話は、鎌倉の飲み屋から、横浜、東京へと飛び火して、アミダさまは、どこかへ行ってしまったて、若き女性編集者だけは、狐につままれたような顔をしている。

さて、ぼくの印象記――

浄光明寺は真言宗のお寺だけれども、真言宗といえば、弘法大師さまを思い出す。ところが、そこからぼくの心は不思議な世界へさそいこまれる。あの色あざやかなマンダラの世界である。

鎌倉末期の傑作、阿弥陀三尊像の中尊のふくやかな顔をしずかに見上げていると、やはりマンダラのイメージを思いうかべた。そしてインドを旅行したときの石像の目を思い出した。永遠をみつめる、まばたくことのない石の眼。

誰に聞いたか忘れてしまったが、真言宗には「理趣経」というとてもエロチックなお経があつて、それが武州立川の修験道かなにかとミックスし、立川流なる淫祠邪教となった由。立川流は滅びたらしいけれども、なるほど、仏さまの顔は、性には無関係でも、いかにもエロチックだと感じられる。中尊の脇侍菩薩ともども、匂うような、酔うような心持ちにさせる。ぼくみたいな凡俗外道の輩だからこういう感じかたをするのではなく、おそらく凡俗外道であるからこそ、そういう感じかたをさせてくれる、それが仏さまなのだろうと思う。それが救ってくれるということなのではないか。

事実、古色蒼然とした阿弥陀堂から出て、樹齡七百年の榎^{まき}の大木を眺めていると、日ごろの心のよごれがすっかり洗い流されているような気持になっている。

酒を売る店のカウンターに向って歩くぼくは、そういえば、仏さまは飲むお金を貸してくれそうな顔だったなと思った。

十月二十四日 晴。R、甲州へ一泊旅行。

この日は、各分野で活躍しているジャーナリストのグループに誘われて、甲州へワインを飲みに行く。新宿八時三十分出発。二十名の老若男女が二台のサロン・バスに分乗。一号車のほうには、若手（といっても四十代）と美女が数人乗りこんだので、ぼくも後につづく。二号車は、最年長の小説家と文芸評論家、それにK大の仏文研究室にいるインテリ女性二名、五十代のベテラン・ジャーナリストが乗りこんだから、ぼくは敬遠。「あれは、救急車ですヨ」などと、ぼくは一号車で、美女にかこまれて、さっそく、オンザロックを飲みながらオダをあげる。

昼食は、ブドー園のブドー棚の下で、白ワインを賞味しながら、バーベキュー。標高六百メートル。甲斐駒が、秋の透明な空気の中かで美しい。

その夜は、山中湖のホテル。夕食後、美女とゴーゴー・ダンス。イギリス大使館の文化アタッシェ氏、大いにハッスルする。

翌日は、富士山を一周するような形で、わが一号、二号のサロン・バスは太平洋岸に出て、興津

の水口屋でさよならパーティ。太平洋のマグロ、ワタリガニをサカナに、日本酒を賞味しながら、甲州のワイン工場で見たホワイト・オークの樽、ワインを三十年、ゆっくりと眠らせていた、あの気品ある樽のことを、ぼくが思いうかべていたら、隣席の最長老の小説家が、しずかに呟いたものだ――

「富士は、やはり、日本一の山ですナ」

*

詩人にとって旅とはなんだろう？ 江戸期の芭蕉や蕪村、一茶は云うにおよばず、万葉の時代から詩人は旅をしつづけてきた。しかし、人間そのものが、この世に生まれたときから、彼岸^{ひがん}の世界に立ち去るまで、この地上を旅しつづけるのではないのか。

そこで詩人は言葉の世界を旅するのだ。言葉から言葉へと、たえず脱皮をかさねながら。

白い波が頭へとびかゝつてくる七月に

南方の綺麗な町をすぎる。

静かな庭が旅人のために眠つてゐる。

薔薇に砂に水

薔薇に霞む心

石に刻まれた髪

石に刻まれた音

石に刻まれた眼は永遠に開く。

——西脇順三郎「眼」

この詩は西脇順三郎先生の有名な旅の詩。南方の綺麗な町とは、いったいどこなのだろう？ イタリヤかギリシャか、あるいは詩人の心の世界で、白い波がおしよせてくる言葉の町なのか。この詩が収められている『Ambarvalia』（穀物祭の意）という詩集は、昭和八年刊行のもの。詩人の青春のおわりが、夏の光のなかで呼吸している。

この詩集からはぼ十五年たった昭和二十二年刊行の『旅人かへらず』という長詩の第一の歌になる——

旅人は待てよ

このかすかな泉に

舌を濡らす前に

考えよ人生の旅人

汝もまた岩間からしみ出た

水霊にすぎない

この考える水も永劫には流れない